

友の会だより 2号

都歴研友の会事務局 〒191-0033 東京都日野市百草971-158 増田方
電話・FAX 042-591-1853

イタリア研修旅行計画など

第2回 総会 報告

今年度事業計画を決める

鍵 山 充 尚

昨年の設立総会に続く、第2回の総会が2008年6月7日(土)16時から、都立小石川高校302教室で開催されました。当日14時からの都歴研春季講演会後の総会で、講演会のみ出席になった会員もいましたが、8名が出席しました。

増田世話人代表の開会挨拶に続き、重政世話人が議長に選出されて議事に入りました。1号議案(2007年度事業報告)の承認に続き、2号議案(2007年度会計報告・監査報告)の議事に入りました。小澤会計からは、会計状況が詳しく報告されました。今後、赤字会計が見込まれる状況を板書して示され、会員の増加も見込まれるので、さほど悲観的ではない旨の説明がありました。会計監査報告は、小澤会計から、大島に出向いて樋口会計監査から、詳細な監査を受けたことが報告され、出席者の理解を得て承認されました。

3号議案(2008年度世話人選出)では、増田代表から会運営を進めるにあたっての方針が示されました。設立直後なので、もう1年は、昨年と同じ世話人をお願いし、以後、少しずつ入れ替わっていただくという議案説明を受けて、世話人を決定しました。

続いて4号議案(2008年度事業計画案)が説明されました。昨年同様に、都歴研実施行事(講演会<2回>史跡見学会<3回>)の案内送付、都歴研紀要の送付、懇親会開催(年1回)、機関紙発行(「友の会だより」第2号)、会員拡大(1月に現職に対する「入会のお誘い」送付)、情報提供(全歴研・関歴研等)の案が示されました。

また、今年度は、「友の会」の自主事業として、「イタリア研修旅行」の実施が発表されました。この研修旅行は、通常の旅行では学べない「友の



会」独自のもので、事前学習会を設定して、研修の成果を更に高めようとするものです。村木逸子世話人に企画・立案していただいたもので、特別な配慮のされている楽しい研修旅行となっています。多数の方には是非参加していただきたいと、熱い呼びかけがありました。5号議案(2008年度予算案)を承認して議事は終了しました。

閉会后、別室で開催していた都歴研の総会で、増田代表が友の会からの寄付金を、都歴研の勝部純明会長に手渡し、満場の拍手を受けました。

総会終了後、出席者全員が巣鴨駅北口に移動し、都歴研の方々と同席した懇親会が開かれ、親睦が大いに深めました。(世話人)

驚いたことと 感心したこと



報告 小澤 拓美

2008年3月7日（金）にかながわ県民センターを会場に関歴研神奈川大会が開催された。いくつも驚き、また感心したことがある。

1 神奈川の教科研究会会長名でだされた案内状に「本会は『都教委があらかじめ指定した研究会等』である都歴研の上部団体により構成」（一部略）との文言があったこと。都教委による自主研修団体への扱いは、近県にも聞こえているものと見える。

2 開催が平日の午前9時30分から全日を使うものであり、そこに神奈川県多くの教諭が出張で参加していたこと。東京にも前世紀にはこういう時期があったように思うのだが、ほとんど忘却のかなたである。

3 分科会で発表された何点もの内容が、山川出版社の「世界史をどう教えるか」（2008. 3. 5 発行）にまとめられていたこと。小生も一冊求めたが、示唆されることの多い優れた内容と思われた。収録されているのはすべて現場教師の研究である。

4 講演は大阪大学の平雅行先生であった。その内容も刺激的でよかったが、さらに感心したこと

がある。平先生は、会終了後の横浜史跡見学に全参加され、講師役の神奈川の先生の話に耳を傾け、まるで学生のように写真を撮っていたこと。

このようにきわめて有意義な関歴研であった。内容的にも得るものは大きかったが、その中で平先生の講演の概略を紹介する。

講演から――

「鎌倉新仏教論の破綻とその再構築」

演題 「鎌倉新仏教論の破綻とその再構築」

講師 大阪大学大学院文学研究科 平雅行教授

- 中世は院政時代からというのが定説化してきた。このような政治経済的中世像の変化とともに、鎌倉期の仏教についての見方も大きく変化してきた。「岩波講座日本歴史」においても、鎌倉新仏教だけの取り扱いだったのが、いまやいわゆる旧仏教のほうが中心になってきた。
- 寺社・貴族は古代的という扱いであったが、10～12Cに封建貴族に再生したと見るべき。中世は、荘園領主と地頭勢力との総合によって成り立つ。公家法、武家法、寺院法の総合が中世的秩序。
- にもかかわらず、鎌倉武士は清新、質実で、腐敗した古代的京都勢力に対するという史観がなぜ生まれたのか。それは、明治期の東亜の新興日本が腐敗した老大国中国に対するという、軍国日本賞揚という観点から生じたのではないか。
- 鎌倉新仏教も仔細にみていくと、教義的にはさほど革命的なものではない。悪人成仏についてもすでに10Cの仏教書に現れている。旧仏教では、悪人往生は常識であった。
- 中世社会において旧仏教の占める役割はきわめて大きい。延暦寺は総合大学であるし、鎮護国家と五穀豊穰、すなわち平和と繁栄を願う役割を果たしたのも旧仏教である。
- 貞慶・良遍は単なる旧仏教の革新ではなく、法相宗の自己否定である。叡尊・忍性は古代

律宗と教義も集団も異質である。逆に、日蓮は、天台宗の復興を目指したのであり、室町時代の日蓮宗寺院は延暦寺の末寺である。

- つまり今日「鎌倉新仏教」とするのは、近世に宗派として認められたうち、鎌倉時代の宗祖をいただいたものである。判断基準は 500～600 年後の処遇である。
- しかれば、中世の中心となった旧仏教をいかにとらえるべきか。民衆にとっては神仏領主から、宗教を梃子にした世俗的支配を受けた。年貢を納めれば極楽往生、領主に背けば墮地獄。こうした仏教の歪曲、利用への怒りに立脚し、仏法の純粹化を目指したのが法然、親鸞、道元、日蓮である。

○ しかし、鎌倉においてさえ、旧仏教が主体であった。北条出身僧 58 (確認) のうち東密 14、山門 8、寺門 24、禅 3、律 2、不明 3。鎌倉の僧正 72 (確認) のうち、東密 31、山門 23、寺門 17、禅 1 と旧仏教が圧倒的である。特に、鎌倉末期の貞時・高時時代に旧仏教は爆発的發展を遂げている。

- 終わりに 歴史を学ぶとは未来からのまなざしを得ること。荒唐無稽なことに莫大なエネルギーをかけたりする、現代のおろかなことを見抜く目を養いたい。

(平雅行「親鸞とその時代」法蔵館 2001 等をご参考に願います。)

< 歴史随想 >

幻の真慈悲寺を追う

——調査ボランティアグループの動き

★

増 田 克 彦

梅の名所・百草園にて

梅の名所として知られる百草園の山を眺めながらの暮らしも、はや 30 年を越える。

百草園は、享保年間以降、現在の京王百草園内にあった松連寺の歴代住職、特に天保年間における魯庵の努力が実り、文化 6 年 (1809 年) の大田南畝『調布日記』、文化 11 年 (1814 年) の『新編武蔵風土記稿』や文政 3 年 (1820 年) の『武蔵名勝図会』、また天保 5 年 (1834 年) の『江戸名所図会』などに紹介され活況を呈した。明治 2 年 (1869 年) の廃仏毀釈による明治 6 年 (1873 年) の松連寺廃寺に伴い荒廃したが、明治 18 年 (1885 年)、地元の生糸貿易商青木角蔵が寺域を買い取って整備・公開したことから、大町桂月や徳富蘆花によって改めて紹介

されることになり、昭和 32 年 (1957 年)、京王電鉄の所有となって現在に至っている。

古書に「真慈悲寺」を探る

さて、『吾妻鏡』文治 2 年 (1186 年) 2 月 3 日の条には

三日辛亥 武蔵国真慈悲寺者 御祈禱靈場也



百草八幡神社裏での発掘作業 08. 6. 20

然而未依無寄附莊園 仏無供具之備 僧失衣鉢之貯 爰僧有尋今日參上 安置一切經於當寺 可修理破壞之由 申請之間 則所被補院主職也

(新訂増補国史大系 32)

とあり、同じく『吾妻鏡』建久3年(1192年)5月8日の条には

八日己卯 法皇四十九日御仏事 於南御堂被修之 有百僧供 早旦各群衆 布施 口別白布三段 袋米一也 主計允行政 前右京進仲業奉行之云々 僧衆 鶴岡廿口 勝長寿院十三口 伊豆山十八口 宮根山十八口 大山寺三口 観音寺三口 高麗寺三口 六所宮二口 岩殿寺二口 大倉観音堂一口 窟堂一口 慈光寺十口 浅草寺三口 真慈悲寺三口 弓削寺二口 国分寺三口也

(新訂増補国史大系 32)

とある。また、京王百草園に隣接する百草八幡神社所蔵になる国指定重要文化財銅造阿弥陀如来座像の背銘には

敬白治磨金銅影像法鉢弥陀座光三尺六寸

奉為皇帝	日本君主	当国府君	地頭名主
御願円満	安穩泰平	信心法王	子孫平安
悉地成就	師長父母	二親亡魂	助成合力
同共往生	乃至法界	平等利益	建長二年
大歳庚戌	孟夏之天	七日壬刀	南閻浮提
日本武洲	多西吉富	真慈悲寺	施主源氏
願主仏子	慶祐敬白		

とあって、この浅草寺に並ぶ真慈悲寺なる寺院が、吉富郷と想定される地域の那邊に存在したかについては論議が続けられてきた。

中世瓦の発掘で明らかに

1991年、京王百草園内のトイレ改修に際して、5000点を越える13世紀半ばから後半のものと思われる中世瓦が出土した。このことが、既に、元禄13年(1700年)、隣接する東京電力総合研修センター(東電学園)敷地内の仁王塚と呼ばれる地点から、長寛元年(1163年)、永万元年(1165年)、建久4年(1193年)銘の3点の経筒が発見されていたこと、1974年に同じく東京電力総合研修センター域内から石組みの遺構と13世紀から14世紀

初頭のものと思われる人骨の入った常滑焼の三筋壺が発見されたこと、近隣の「あさひさま」と呼ばれていた地点を中心に鎌倉から室町期の板碑が計67基確認されていること、開基は明確ではないが1873年まで松連寺という寺院が存在し、百草園の東200メートル程のところにはその歴代住職の墓が存在すること、また近在には、真堂が谷戸、宝蔵橋、新堂橋といった地名が残っていること、この地が武蔵国府(府中市・大国魂神社界限)と旧武蔵一宮(多摩市・小野神社)から見て真西に当たること、4世紀末から14世紀初めにかけて山麓に大集落(落川・一の宮遺跡)があったことなどあいまって、百草園を含む丘陵全体が霊場としての意味を持ち、真慈悲寺はこの地にあったに違いないと考えられるようになった。

現在、真慈悲寺は、遅くとも12世紀初め、恐らくは天台寺院として建立され、12世紀末、有尋という僧の努力と鎌倉幕府の援助によって再興されたが、建武2年(1335年)の鎌倉大仏殿や高幡不動堂が倒壊した際と同じ台風の被害にあって崩壊し、高幡不動堂が高幡氏等によって再建されたのに対し、幕府の庇護下にあった真慈悲寺は再建されることなく潰え、その跡地は室町・戦国期には上杉あるいは後北条等によって城砦として利用され、そして早ければ16世紀末の天正年間には、臨濟宗、続いて黄檗宗の松連寺が建立されたのではないかと考えられている。

「一緒にやってみませんか」

ところで、「一緒にやってみませんか?中世の謎への挑戦」として、「消えた大寺院・真慈悲寺を探る事業ボランティア・スタッフ募集」が市の広報に載ったのは2006年6月であった。応募した32名はその年の8月、計20時間に及ぶ講義と実習の研修を受け、翌9月から活動することになった。組織的にはとりあえず「調査の会」となったが、「新選組」に続く町おこしの思惑もあって市が組織した、市各部局、京王電鉄、観光協会、神社氏子会、地元自治会、史料所蔵者、研究団体等で構成する「幻の真慈悲寺調査事業推進プロジェクト」

のもとで働くいわば実働部隊である。

以来1年9ヶ月、市立郷土館などの学芸員の指導と都立大名誉教授峰岸純夫氏等の助言のもと、発見された瓦の整理、瓦の大きさ・重量・密度等からの建造物の想定、参考としての瓦製作、類似の瓦が出土した神社仏閣の現地調査、『吾妻鏡』に記載されている百僧供寺院の現地調査、刻銘の「施主源氏」とは誰かについての考察、御願寺の研究、黄檗宗・臨済宗等松連寺関連の調査研究、旧百草村の地誌調査、「松連禅寺碑」をはじめ百草園内外の拓本取り、丘陵一帯に散在する平場や舌状丘陵等での実地踏査と発掘調査、スタッフによる研究発表会や研究者等を招いての各種学習会、4月末の郷土館祭における展示と現地ガイドや9月第二日曜の百草八幡の祭礼に併せて行う現地ガイド、2007年9月から12月にかけて開かれた市立歴史館における真慈悲寺にかかわる特別展示でのガイドなど、幅広い活動が続けてきた。遊びとしての新田義貞鎌倉攻めの道を辿る鎌倉往還上ノ道を基本とする新田の生品神社から小手指・分倍河原を経、稲村ヶ崎を渡って鶴岡八幡宮までの全行程を徒歩で行く旅も着々と進んでいる。

ひと味違う「郷土史家集団」へ

この4月の再募集で多少の増員が見込まれるが、現在、会員は男性25、女性5。50歳代後半から70歳代後半。建設、石油、金属、卸売、銀行、証券、サービス、マスコミ、公務、教育、専業主婦などその経歴も多様である。もっとも、その殆どの活動に参加している積極的な者は10名前後、随時相応の活動をしている者が小生を含む10名程、残りの10名は思い出したように顔を出すといった状態である。

日野市にも都歴研がお世話になった郷土史家といわれる方が何人もいらっしゃるし、郷土の歴史・地理等の調査・研究・探索をなさっておられる方が多数いらっしゃるが、観光協会の中に組織された「新選組ボランティアガイド」等とは異なる意識を持っているように見受けられるこのボランティアグループは、これまでの郷土史家とは一味違

う視点と発想を持つ新しい郷土史家「集団」として成長していくのではないかとと思っている。

(2008. 4. 23)



去る3月8日(土)・9日(日)、1泊2日の日程で都歴研友の会の先生方と大島に行く機会を得た。好天にも恵まれ、楽しい小旅行となったが、何よりも樋口秀司先生の親切な計らいによるところが大きく、この場を借りて改めて御礼を申し上げます。

8日の10時過ぎ、ジェット船で元町港に到着した私たちは、そこで樋口先生と合流、その日の宿であるホテル赤門に向かった。ホテル赤門で、樋口先生作成の大島の史跡に関する資料集(ファイル2冊)とパンフレット等をいただき、当日の予定をうかがった上で島内見学に出発した。自動車2台に分乗しての移動だったため、多くの場所を能率よく見学ができたが、ドライバーの樋口先生と小澤拓美先生には大変なご負担をおかけすることになりました。

ここでは紙面の都合上、2日間の見学を通じて印象に残っていることを記してみたい。

最初に伺ったのは「大島ふるさと文庫」。樋口先生が自宅を増築して書庫を作り、膨大な書籍を整理して、地域の若い人々の閲覧に供しようとして創設されたものである。その志に共感された出久根達郎氏が“大島ふるさと文庫”と看板の文字を揮毫して下さった由、書籍の整理はまだ終わらないとのことであるが、大島を初め伊豆七島の歴史や文化に関する文献を一日も早く整理供覧されるこ

とを待ち望みたい。ちなみに出久根達郎氏は中卒後上京して働いていた古本屋のご主人から、将来古本屋になりたいのなら古典を読みなさいと言われた由、また本を立ち読みして帰っていく子どもたちについて、そのご主人は子どもたちの将来を慮って寛容な態度で遇していたことを述懐しておられたが、胸を打つ話である。

「大島ふるさと文庫」では、明日葉の種子をいただき、帰ってから蒔いたところほどなく芽吹き、青々と繁ってきたのはうれしい限りであった。

「大島ふるさと文庫」から、郷土資料館を見学したあと、昼食をいただき、午後は御神火スカイラインをドライブし、旧登山道の五合目にある「三原山地蔵尊」に参拝した。

延命地蔵や六地蔵、木村武山の「線彫地蔵尊」が祀られ、中村不折の「三原山地蔵尊」標柱がある。ここの地蔵尊は、三原山での自殺者を供養し、併せて死に急ぐことのないよう、祀られたとのことであるが、木村武山の仏画と中村不折書の標柱ともども大島の貴重な文化財として、後世に残していただきたいと思う。

また、三原山頂口に近い丘の上に建立された「航空慰霊碑」も、「もく星号」の遭難事故を想起する慰霊碑として忘れがたい。三原山に「もく星号」が墜落したという事故は、私の小学4年生の時のことであり、子どもながらに強いショックを受けたのを憶えている。

三原山頂口から少し走って、山腹割れ目火口跡を見学した。昭和61年11月の三原山噴火の様子はテレビのニュースや新聞で毎日報道され、特に夜の噴火は真っ赤な火柱が空高く上がり、また溶岩が流れ出すなどの恐ろしい様子が映し出されていた。そして山頂噴火から外輪山北西斜面でも噴火が起こり、山腹から溶岩の噴泉が噴き上げるようになったという。その割れ目火口跡をまちかく見ると、元町も指呼の間に望まれ、元町の人々の恐怖もいかに分かりだったかと推察できる。

山腹割れ目火口跡を見た後は、藤森成吉文学碑を見て、椿園に向かった。椿祭りの最中であつたが、時間が遅かったせいか観光客も殆どおらず、



写真上：波浮港 中：赤穂義士遺族の墓を案内する樋口先生
下：藤森成吉文学碑

のんびりと散策できた。大島桜も満開で素朴な雰囲気醸し出していた。

2日目は、野増から差木地を経て波浮港界限の見学が中心であつた。最初に訪ねたのは野増の「武田信道及び家臣供養塔」。大久保長安の一件に連座して大島に流罪となり、大島で没した武田信道夫妻とその家臣の供養塔であるが、野増の人たちが供養塔を守り続け、今も毎日掃き清めており、「武田家を思う皆さんに代わってご供養させていただいているだけ」（村松繁治氏）と話されているという。「ご供養」という言葉が強く印象に残った。

次いで地層切断面（バームクーヘン）を見学し

た後、波浮港へ向かった。波浮港見晴台から眺める波浮港はその景観からいかにも天然の良港であるが、その歴史を見ると秋広平六による港口開削工事による賜物であり、寛政12年に完成したという。伊豆諸島と江戸を往来する船にとっても、上方と北国と江戸を往来する廻船にとっても、波浮港は風待港として重要な役割を果たしていたのである。波浮港口開削の恩人である秋広平六の墓は波浮港上の山地区の旧墓地にあり、ひさしぶりに訪れることができた。

波浮港はまた踊り子の里としても有名であり、旧港屋旅館は繁栄をきわめた往時の様子を留めている。踊子たちは港屋旅館や甚の丸邸からお呼びがかかると出かけて行って踊りを披露したが、その行き来した坂を踊子坂と言うようになったという。

踊子坂の途中には神明様と呼ばれる社がある。その謂れは、榎本武揚が開陽丸で函館に向かうとき、水先案内人をつとめた松下常吉という波浮出身の船頭がいた。榎本は函館に到着すると、常吉に帰郷するよう命じ、六部姿に身を変えて帰郷させた。無事波浮に戻った常吉は背負ってきた箱の中の小さな木彫りの仏像を無造作に放置していた

が、港屋旅館の女将さんのすすめでその仏像を祀ったのが神明様という。これなどはまさに歴史を知る楽しさといえようか。

踊子坂界隈を散策し、旧甚の丸邸を訪れた後、秋広平六の墓と併せ、徳島藩士の墓に詣でた。その後、オタイネの碑や筆島を見ながらドライブした後、貝の博物館ぱれ・らめ〜るを見学。約4,500種類・約50,000個を展示しているそうで、変った形の貝や鮮やかな色の貝、ごくごく小さな貝など様々な貝の世界に見とれてしまった。

貝の博物館の見学後、昼食を摂り、午後は赤穂義士遺族の墓に詣でた。赤穂義士の遺子で15歳以上の男子は遠島となり、4名が大島に送られたが、間瀬定八は赦免を待つことなく22歳で死去したという。その間瀬定八の墓が元町の共同墓地にあるが、大島ならではの流人史の一コマといえよう。墓地から程近い金光寺には定八の礼拝墓もある。また間瀬定八の墓の隣には越後騒動に連座して配流となった小栗兵庫・十蔵兄弟の墓が、金光寺には安藤治左衛門の墓がある。

時間の関係で火山博物館は割愛せざるをえなかったが、二日目には伊豆半島の山並みが遠望でき、その点でも印象深い旅になりました。

ご紹介

イタリアの歴史を楽しく学ぶ本

村 木 逸 子

友の会は今年度の海外研修地としてイタリアを選びました。

訪ねる都市はローマ・ピサ・フ

ィレンツェ・ボローニャ・ヴェネツィアなどです。

イタリアは世界遺産に指定された場所の数も多



く、日本人の行きたい外国でもトップに位置する国です。また、スローフード運動などでも世界を

リードする国です。日本のレストランも今やフレンチよりイタリアンが大流行です。

そのような世相を反映してか、書店にいくと「イタリアもの」の本が沢山出版されています。この機会に何冊かの本を紹介いたします。比較的手に入れやすいものを選びました。視覚に訴えるものをみれば旅行には行かなくても十分に「イタリア」を堪能できると思います。

1 古代のローマ

ローマ人の物語「ローマは一日にしてならず」 (上)

塩野七生 著 新潮文庫

単行本で全 15 巻の「ローマ人の物語」は古代ローマを知るためには最も詳しい本でしょう。年代的な著述ではなく人物像が浮かび上がってくる書き方で歴史を身近に感じさせてくれます。この長い歴史の本に取り組みめるかどうかはまず初めのところで興味をもてるかどうかです。文庫本の 1 冊目を紹介します。次のような内容がつかめます。

ギリシャ人は海岸に都市をつくる。代表例はナポリ。エトルリア人は丘の上に都市をつくる。フィレンツェ・シエナ・ヴォルテッラ・ペルージアはエトルリア人が造った古代から続いている都市。彼らは鉄の製法を知り土木工事にも長けていた。ローマを建国したラテン人（ローマ人）はテヴェレ川の東岸にまだ人が住んでいない小高い 7 つの丘を見つけ、そこに住み始めた。3000 人くらいの羊飼いや農民の男たちがロムルスを取りリーダーにして城壁をつくり女達を迎え入れ・・・・政治の方法は王・貴族の元老院・市民集會でおこなう。初めのうちはパラティーノの丘の上で。人口が多くなると低湿地を埋め立てて大きな広場にし、そこで政治をおこなった。フォロ・ノヴァという。神々を祀った丘がカピトリノの丘。

後に大きな帝国になるローマもこの 7 つの丘が原点。そして現在のローマにそのまま丘や広場がある。カピトリノ美術館が建ち、遺跡フォロ・ロマーノが眼下に広がる。

「図説 永遠の都 カエサル」

佐藤幸三 著 河出書房新社 ふくろうの本

現在のローマの遺跡を古代の建造物と対比させ古代のローマを蘇らせる図や写真が豊富な本である。大きな版図を統治したローマ帝国であるが、政治の中心はローマ、各時代の皇帝が建てた建造物が周辺に広がり、最盛期に人々が見せ物を楽しんだコロッセウムなどはあまりに大きく、その後侵入してきた民族が破壊し、石を持ち去ってもまだ当時の原型を残している。フォロ・ロマーノではカエサルやアウグストゥスに会えそうである。想像力をかき立ててくれる本で楽しい。



2 中世のローマ

「ローマ散策」

河島英昭 著 岩波新書

この本は古代、中世、近世ルネサンス期、近代と全ての時代のローマを描いているが、少々難しい。ローマに暮らし自分で歩いて確かめた歴史の記録なので、ローマの地図をじっくりみながら想像力を働かせて読むと実に奥深い本である。

中世のローマについてはⅢ章 スペイン階段を見下ろしながら Ⅳ章 オベリスクを辿って に詳しい。エルサレムやサンチャゴ・デ・コンポステーラと同様、多くの巡礼の訪れた都市、宗教都市としてのローマが浮かび上がってくる。主な場所に目印としてオベリスクを建てた。さて石材はどこから持ってきたかなど具体的で面白い。サン・ピエトロ寺院の広場、スペイン広場などポピュラーな場所に聳えているオベリスクは見落とされがちなのでこの本を読むとしっかり見上げることになるだろう。本物はどれだ？

3 地中海交易とヴェネチア

「海の都の物語」 ヴェネツィア共和国の一千年 (上) (下) 塩野七生 著 中公文庫

塩野七生さんは自分が惚れ込んだ都市を描く。多くの人がイタリアに興味をもつきっかけになったのがこの本である。ヴェネツィアが最初から最後まで「共和国」という政治体制を維持し、自由な海洋国家として地中海に勇躍した歴史を読めばサンマルコ広場に立ってみたいくなる。少し分量が多いかもしれないが紹介しておきたい。

「ヴェネツィア 水上の迷宮都市」

陣内秀信著 講談社現代新書

陣内先生は南イタリアでも名の知れた日本人である。なぜなら先生の専門は建築学でフィールドワークを中心にイタリア都市の研究をしており、毎年学生を伴って地中海世界の建築を訪ね歩き、風土にあった建築の素晴らしさを実証しているからイタリア人に歓迎されている。ヴェネツィアは先生のイタリア研究のスタートの都市。海に浮かんだ何千もの島々で成立している道路がなく運河で結ばれた不思議な都市の魅力を、歴史も踏まえながら解説してくれる。

「イタリア・都市の歩き方」

田中千世子著 講談社現代新書

映画の舞台としてのイタリア都市を紹介してくれる。「旅情」「夏の嵐」「ヴェニスに死す」など往年の映画の舞台のヴェネツィアだけでなく、フィレンツェやローマも紹介されている。映画好きの方は是非読んで欲しい。

「ヴェネツィア案内」

新潮社 とんぼの本

渡部雄吉／須賀敦子／中嶋和郎 著

著者に亡くなられた須賀敦子さんが入っているのだからわかるだろうが、1994年発行の少々古い本である。内容は多いが写真も入っているので読みやすいだろう。須賀さんもヴェネツィア通だった。エッセイ「ザッテレの海岸で」が素晴らしい。

4 ルネサンス都市 花の都フィレンツェ

「図説 ルネサンスに生きた女性たち」

佐藤幸三 著 河出書房新社 ふくろうの本

フィレンツェと
言えばイタリアル
ネサンスの中心都
市、ダンテやボッ
カチオなどの文学、
ボッチチェリや
ダ・ヴィンチなど
の美術が溢れる都
市である。都市貴
族としてのメジチ
家が市政を担い芸



術家を保護していた。この本は華やかな都市の様子を女性を通して描いている。

「永遠の美女 ソモネッタ・ヴェスプッチ」を知っていますか？ そしてその恋人といわれた貴公子は誰かわかりますか？ どの絵画に描かれているでしょうか。

「世界の都市の物語 フィレンツェ」

若桑みどり 著 文春文庫

若桑先生も残念ながら鬼籍に入られてしまった。西洋美術史 図像解釈学などで有名な先生が「フィレンツェ」に行って絵画をみるなら都市の歴史を

知らなければならぬ」と、有名な絵画を折り込みながら都市の歴史をまとめられた本である。フィレンツェの「ウッフィーツィ美術館」には膨大な美術作品があるが、どのような予備知識を持っていって



らよいかなどがこの本に書かれている。キリスト教以前の古代の神々をあらわす作品、キリスト教の主題と図像、聖人の見分け方など若桑先生ならではの説明が有難い。

5 現在のイタリアから発信されているのは

最近出版された光文社新書に「パール、コーヒー、イタリア人」がある。“グローバル化もなんのその”と副題がついている。マクドナルドやスターバックスが世界を席巻している現象に抗して、イタリア



の文化であり、イタリア人の心でもある「パール」を守り続けているという骨のある国のことが書かれています。著者の島津奈津さんは「スローフードな人生」（新潮社）で日本にスローフード運動を紹介してくれた人です。冬期オリンピックの開かれたトリノ市のあるピエモンテ州の小さな町ブラからこの運動は始まった。グローバル化ではなく自国の、地元の農作物を大事にしよう、その「種」を絶やさないようにしよう、という運動は世界中に広がって 50 以上の国に 80,000 人の会員をもつという。

「ボローニャ紀行」（井上ひさし著 文藝春秋）は著者が 30 年来憧れていた都市ボローニャの町の人々が作り出した「志をもつ者が集まって協同組合をつくり、みんなで難問を解決していく」方法の面白さ、お金のかからない都市作りを紹介している。中世に最も古く学生と教授が双方とも組合をつくり「大学」を成立させたボローニャの伝統が今につながっていることがみてとれる。社会福祉についても目を開かせられる。

「イタリア 小さなまちの底力」（陣内秀信著

講談社）はイタリアでは小さな町が輝いていると、多くの個性的な町作りを紹介している。ボローニャが新しい巨大な建築の立つ町ではなく古い中世都市の建造物を生かした町の再生をはかったこと、ヴェネツィアの迷路こそが町の資源であること、田舎町の家族経営の企業ベネトンが世界を市場と

して頑張っている様子など、過疎化とか限界集落などの言葉が飛び交う東洋のどこかの国とは異なる理念が大事にされている町の様子を生き生きと報告している本である。

募集

イタリア研修旅行

期日 11/4（火）～11（火）
案内・申込書は業者より会員宛発送済み
申込み〆切 9/26（金）
事前研修会 9/27（土）10:00～

都歴研等の08年度行事予定

全歴研49回大会

7/30（水）～31（木）

於 江戸東京博物館

全歴研都歴研共催海外研修旅行

8/2（土）～6（水） 台湾

秋季史跡見学会

11月（10月1日を検討中）

関歴研埼玉大会

11/26（水）川越市立博物館

講演 黒田日出夫氏

秋季講演会

12/12（金）小石川高校

春季史跡見学会 3月

（なお、財政難から次年度以降講演会は年1回を検討中とのと）

